

倉田 そうですね。それに関連していた人は一人、その中にアドバイザーで入っていて、ユニフォーム着てやっています。確かに伊藤さんが言われるように、もう少しコミュニティ側でそういうことをやっているのか、やはり、公的なところで公権力がそういうことをやるのか、この差は結構あるかもしれないですね。

伊藤 これを文章にするかどうかは別として、一昨日、小出先生にお話をうかがったときに、日本は犯罪がプロ化とアマチュア化に両極化してきつつあると。プロはプロで蛇頭みたいなものと、ヤクザが結託して、バサッといって平気で人を殺して、ゴソッとお金を取ってくるとか、そういうことをやる。逆にひったくりとか、そういうレベルというのは、昔はひったくりというのは、宝石とかつけた飲み屋のお姉さんや、そういう人が狙われたのだけれども、少年が千円、二千円のレベルで、その辺の人を平気でひったくりする、そういうふうにも両極化しているというのですよね。その時に、今の警察というのは、両者に対して同じように対応していると。逆に凶悪犯罪、広域犯罪に対しては、アメリカのFBIのように、すごく優秀な警官をあてて、凶悪犯を全国規模でそれを見る。逆にこちらの方のひったくりとかそういったものは、例えば、ストーカー問題というのは、警察が何でもかんでも飛んでくるというのではなく、それをそのNPOとか、それこそ私設警察などの地域のコミュニティみたいなもので、例えば、自分の町でひったくりが多いということであれば、自分たちがどうしたら減らせるか、放火が多かったらどうしたらゴミをなくして明るくできるかとか、そういう問題を分けてやっていって行く。アマチュアの犯罪に対しては、警察がやるのじゃなくて、街づくりでできるのではないかと、いうことをおっしゃっていたのですけれども。

倉田 僕も専門ではないのですけれども、今のお話を伺っていると、確かにそういう気はします。それから、今の警察、特に犯罪ということだけで言えば、今の警察を見てみると、非常に中途半端な気はします。それから、単純に一国民としてみていると、やはり、犯罪の検挙率とかも非常に低くなっているのではないのかなという気がする。そういう意味で、警察自体の、今の社会で起きている様々な犯罪に対しての対応というのが、やはり、質的に変化しているものに対して、十分に対応していないのではないかな、ということを感じます。やはり警察自体がまだ日本においては当然かもしれないですけど、公権力の代表選手みたいなもので、市民にとってみると、ある意味では、できれば関わりを持ちたくないという対象であって、身近な存在ではないですね。言っていやな思いするくらいだったら、あまり相談しないほうがいいのではないのかくらいの感じに近いのではないかなという、それは単に、刑事犯罪ということだけじゃなくても、警察に対して持っているイメージでして、日常的なところでもあまり警察というものが我々の生活の上で、我々の立場になってものを考えてくれているというふうには、あまり思っていない。ということでは、もう少し犯罪自体が二極化していくとすれば、プロ化した犯罪ではない、もう少し身近で起きてきている犯罪などが、従来どおりある犯罪なのか、そうでないものかという、非常に微妙な部分も含めてそれを警察に頼っていくということは、なかなか難しいのかな。警察自体が、刑事的なものだけではなくて、街づくりやっていて、やはり警察の対応ということに関して言うと、不信感を持っていますね、僕は。特に、交通がらみの、いわゆるまちづくりで、やはり歩く人にとって快適なまちづくりを進めようということで、かなり地元を含めて議論して、できるだけ通過交通を排除した、歩行者に優しい環境づくりをしようといって、例えば、ある通りを、こういうシステムで交通をやれるのではないかというふうには、ある程度シミュレーションした上で、面的なものを含めてこの通りを一通にして、少し歩道を拡幅したらどうか、という話とか、そういう話を持っていても、ほとんど門前払いですね。だからそういう姿勢というか、やはり、犯罪に対する姿勢だけではなくて、こういうところも共通しているのではないかなと。それはやはり、まさに公権力の象徴みたいなところで、本当に悪い意味で、そういうところに居座ってしまっていて、ある意味でそれを勘違いしているから、今、警察の中で起きているさまざまな不祥事というのも、基本的には一つではないかと、僕は思います。で、あと確かに犯罪についてのプロ化というか、組織化、それはもうさらに、インターナショナル化しているというのはあって、これはあまり日本が経験してなかった。特に日本だと昔、暴力団といっても地元の警察っていうのは、結構それなりに実態を把握していたところもあるかもしれないけれど、かなり犯罪自体がグローバル化している。そうなるとうと、アンダーグラウンドの部分が非常に増えているのかなと。特にちらちらと新宿あたりでいろいろ起きているようなことを聞いていると、やはり、本当に見えていないところのそういう世界が、相当広がっているのかなと。例えば車の窃盗などではすごいですね。ああいうものというのは、ちょっと考えられない犯罪だったりしますし、もちろんその凶悪化ということでも同じかもしれないですね。

谷 警察のことで、アンケートでもちらほら出ていたのですけれども、やはりその、警察が公権力の代名詞みたいになっただけは、決して昔からではなく、昔は例えば交番のお巡りさんというのは、割と親しみをもって接していたし、よく道を聞いたり。

伊藤 親切でしたね。家族の様子を知っていて。

谷 ええ。サザエさんの漫画にも出てくるお巡りさんみたいなお巡りさんもいたわけですが、それがいつのまにか、公権力で高飛車で、市民無視みたいなイメージになったっていうのは、やはり、警察が変容しているのかな。私がひとつ思うのは、交通の取締りが警察を市民からいやなものというふう位置付けて、それで市民から協力がなくて、だから検挙率が落ちるということになっていると思うのです。例えば、ちょっと軽微な一方通行違反したとか、駐車違反すると、うちの娘も言っていましたけれど、がんがんに怒鳴られる。それでいながら、暴走族などは野放しになっている、というイメージを、一般の市民が持っているわけですよ。警察は嫌なところだなと。あれを変えないといけないのではないかという気がしているのですけれど。

倉田 そうですね。それは本当に谷先生の言ったとおりの気がします。だから一番、警察が犯罪以外のところで我々の生活の中で身近と感じる機会というのは、やはり交通取締りという時に、結構みんな感じている事だろうと思うのです。だから、その時に犯罪者扱いじゃないにしろ、少なくとも、関わりを持ちたくない、という存在にどんどんなっていってしまっている事は確かですね。

伊藤 先程、一方通行の話で思い出した、別の話なのですが、藤野先生にインタビューしたときに、やっぱり、車社会になってしまって、人と人のふれあいが無くなってしまった、と。車なんかだと、特にベンツなんかのいい車に乗っていると、ドライバーがすごく強い人間になった気がしてしまって、歩行者なんかどけどけ、という感じで走ったりする。どんなに細い道路にでも車が入ってくるようになってしまって、それこそフェイス・トゥ・フェイスというか、コミュニケーションが車によってなくなってしまった。一方でその、先程のサザエさん的なお巡りさんというの、車社会になっていると、自転車に乗ってくるぐる回っていても、取り締まれない。やっぱりパトカーに乗っていないと。それこそバイクでひたくりなどをやったら、自転車で追いかけても、追いつかないというのがありまして、やっぱりこれは車社会によって、人の接し方やコミュニケーションもなくなってきているし、犯罪も広域化して、一人の人間が色々なところでやるとか、逃走などもやっぱり、それこそ歩いて空巢する人間なんてあんまり居なくなるわけですね。藤野先生は土木の先生なので、社会工学とかがご専門なのですが、震災とかがどんどん起こるたびに、社会を強くしようということで、社会インフラをどんどん整備し、それによって、道路もよくなり車も増えて、社会を便利にしてあげると、人間的な色々な感じかたとか、センサーみたいなものがどんどん退化していく。そうすると、教育なども結局、直接のコミュニケーションがなくなって、近所の人間でも人を怒れないとか、人の子は怒れないとか、そういうふうになっていくのではないか。社会の安全を追求して、どんどんインフラを整えていくと、逆にコミュニケーションが低下していくのではないか。

倉田 僕も先程、言葉足らずだったかもしれないですけど、街づくりのコミュニティの話をしたときに、やはりそれが一番象徴的に、街づくりの問題として出てきているのは、間違いなく人間、我々の生活の質を車社会が大きく変えてきたというのは、本当に一番大きい要因であると思います。特に、戦後の日本の都市とコミュニティ問題とか、人間関係などを考えていると、それが一番強く感じています。特に、車社会が進んできたことというのは、色々なところに、ここで挙げているいくつかのことにみんな関わってきている。例えば地球環境の問題だって、そういうところはあるわけだが、人が自家用車で、日常的に密室化した空間で移動しているわけだから、ほとんど人と接する機会というのはなくなるというか、少なくなるわけですね。だから、これは今日の話ではないのですけれども、僕は色々なところで、人の歩くことを中心として、まちづくりを30年以上前から、大学院時代から研究会みたいなことをやってきたので、余計強く感じています。ちょっと話がそれるかもしれないのですけれども、アジア的な都市景観の特種として、ヨーロッパは広場で、他はもうどちらかというとアジア的な街の都市空間の特徴として、街路って言うのは、私自身の仮説だったのだけれども、色々なパブリックライフや、パブリックスペースにおけるパブリックライフというものが豊かであるかどうかというのは、アジアの都市が特徴をつくってきたと思っているので、そういうところで、人と人のコミュニケーションというものが成り立ってきた。だから、誇張して言えば、歩行者空間としての街路の復権というのが、まさに人のコミュニケーションを取り戻す大きな

きっかけになるのではないかと思っていますのです。やはり、もともと道というのは車のためではあったけれども、特にアジア的な街路の使い方っていうのは、人の移動空間だけではなくて、あるときはプライベートな空間の延長として、道で子供たちが遊んでいたというのがあったわけですけど、そういう中で、道を介して地域が色々と相互に、そこに住む人たちのコミュニケーションが成り立っていたりとか、色々な集い場であったということであると、必ずしもノスタルジックな意味だけではなくて、まさにパブリックライフというものが成り立つ場がどんどん失われてきているというところに、非常に問題があるのではないかというふうに思っています。だから、それを突き止めていくと、いくつか象徴的に現れてくるのがいくつかある。それがまさに、車社会がどんどん進んできて、特に歩行者が脇に追いやられるというふうになってきてことも一つの現れだと思っていますのです。

伊藤 話題を変えますけれども、特にアンケートの「C」のところに関連している質問なのですが、最近、個人情報保護法というのがですね、国会で議論されています、マスコミはいっせいに反対しているようにけれども、一方でこういった社会的な安全が脅かされることに対する報道のあり方というか、マスコミのあり方、これも小出先生がおっしゃっていたのですけれども、犯罪に対する市民の意識というのは、結局は伝聞だと言うのですよね。自分が犯罪にあったことがなければ、やっぱり、ニュースや新聞を読んで、自分はどうか、同じぐらいの子供がいるとか、自分の近所でも同じような犯罪があったとか、同じような環境に住んでいるとか、同じような生き立ちだとか、そういうことで、結局その報道によって、犯罪を感じるものであると。しかも、犯罪にあったことがない人は、犯罪を意識するのが不安感だということです。犯罪にあったことのない人、一般市民にとって、犯罪自体が怖いというよりも、犯罪に対する暮らしの中での不安感というもののほうが重要だと。それに対して、例えばこういう凶悪事件に対する報道のあり方、例えば、加害者よりも被害者の方をワイドショー的に突っ込んで報道するとか、事実を伝えるのに効果音で脚色したり、事実にはあまり関係のないような事まで根掘り葉掘り報道するとか、そういうことに対して、どのようにお考えですか。

倉田 今の日本のジャーナリズムが非常に社会の中において健全な形で機能しているかというといわれると、かなり、ジャーナリズムの質の低下というか、それは、僕はあるのではないかと思うのです。それは多分、いろいろな取材の仕方は、昔と比較されるのだけでもやはり、ジャーナリズム自体が一時情報というか、自分たちできちっと取材した情報というよりは、二次的な情報とか、その発表をそのまま記事にするというのは、ほとんど日常化してしまって、自分たちの取材というのはきちっと行われていない、ということをよく指摘されているのだけれども、僕は、その通りじゃないかなという気がするんです。だから、そういう点でジャーナリズムの質の低下というのは、かなりあるのと思っているのだけれども、その一方で、今、行われようとしているジャーナリズムに対しての、個人のプライバシーの保護というのはあるにしても、それが目的であるという点では、それほど意味はないけれど、結果として今進められているような、ああいった制度の問題というのはもう少し十分時間をかけた議論が必要じゃないかと。両刃の剣で、ジャーナリズムに求められているような機能というか、その制限してしまうことになるっていうことも、今の法律では多分あるのかなと思うので、これから議論されようとしている内容に関して、そういう所はあるのではないのかなとは思っています。ただ、ジャーナリズムが果たす役割は非常に大きいことは確かだと思います。そういう中で明らかにジャーナリズムが果たしている役割、特に、今の犯罪などを見ても、ジャーナリズム自体が非常に多様化しているので、例えば新聞やテレビだけではなく、これからは非常に色々な可能性が出てくるわけです。情報自体は特に、インターネットなどを含めて色々な形での情報発進っていうものが可能になると、逆に言えば情報を受ける側の判断能力が、やはり求められてくる。そうしたら、情報を取捨選択するような気もするし、その辺のジャーナリズムが果たす役割は大きいと同時に、これまでのジャーナリズムの議論とはまた、少し角度を変えて議論しなければならない要素というものが、非常に出てきているというのは感じます。その時に、メディア要素っていうものが、すごく多様化しているので、そういう意味では、従来のマスメディアだけではなくて、従来のマスメディア以外の、もう少しコミュニティレベルでのメディアのようなものを含めて、あるいは、インターネットを含めた、これまでの情報ソースとは違うような、現にインターネットで色々なデマが飛ぶとか、特にこれは非常に難しいのかもしれないですけど、その区別がなくなってくるわけです。それで、個人に対しての色々な中傷とかが、非常にあるわけです。だからその辺が、メディアが多様化してくると、それに対して全く法整備がいらぬかという、多分どこかで必要なだろうけども、ただ、今行われているよう

な、非常に安直な形での報道に対しての規制というのは、少なくとも時間かけて議論しなければいけないのではないかと思います。色々と感じていることはあるのだけれども、僕自身はどうしたらいいの、新たに今起きつつあることについてどうかっていうことになる、どのくらい社会に影響を及ぼすかということに関して言うと、漠然と色々な影響をもつだろうということにはわかっている、その影響の大きさとか、その辺になると、まだ読めない部分がある。

谷 日本はメディアに対して遅れていますね。アメリカであれば、例えば、メディア学みたいなものがありますね。大学にもメディア学部みたいなものもあって、専門家もたくさん居るし。今度の議論なんかでも、専門家の顔がぜんぜん見えてこないですね、政治家主導で。政治家と官僚で、官僚がすべてものを決めてしまうと、絶対良い方向に行かないですね。

倉田 ただ一方で、やはり今それに対して声あげているのも、どちらかという、非常に伝統的な従来型のマスメディアの人たちが、それに対して報道の自由とか、そういうことで言っているのだけれども、一方でそうでない色々なメディアが、社会の中にどんどん位置を占めるようになったとき、それに対して、彼ら自身がそれをどういうふうにか考えるのか、例えば、メディア側での自主規制という議論が機能するのは多分、従来型のマスメディアの世界であって、そうではない、もう少し可能性があるインターネットを通して、プライベートに近いところでの情報発信、意図的に色々なことをやろうとすれば、いろいろなことができる可能性がある。メディアに対してどうするか、そういうものを含めて、どうかと言う議論は、あまり出ていないから。

伊藤 私はむしろそちらの方が、ひどくなっているような気がするのです。今の法律は、メディアの発信のほうではなくて、取材に対する規制ですね。例えば、何回 FAX を送ってはいけないとか、直接何度も聞きに言ってはいけないとか。そうすると、結局そこを規制してしまうと、それでも知りたい側の人間というのはいるわけですから、それこそ裏のルートですね、デマだかなんだか分からない話を、発信者不在、ちゃんと言質とったわけではないのにどんどん出してしまおうとか。

倉田 それは大きいですね。それこそ本当にちょっとしたデマが増殖していく仕方というのは、半端じゃないですね、ああいうものを使えば。

谷 現実にそういう問題はいっぱい起きているわけですね。病院などではデマが流されて、急に患者がなくなるとか。先程、日本のメディアの質が悪いという言う話で、面白い話があるのでお聞かせしたいのですけれども、アフガニスタンの問題が起こったときに、ワイドショーがみんな送ったわけですが、レポーターと称する若いアナウンサーみたいなのを。パキスタンで売っているTシャツに、オサマビンラディンを賞賛する言葉が書いてあるとあって、Tシャツを出して（指差しで文字を左から右になぞりながら）「オサマビンラディン」と読んだのです。何がおかしいかわかります？逆なのですよね。それさえ知らないで取材にいつているというね。

倉田 実感としてね、ある時期に僕は、たまたまそのメディア、新聞とかに知っている人が何人かいたものだから、なにか起きたときに、電話で取材を受けるというのが何回かあったわけです。そこで電話のやり取りを色々するわけです。だけど次に新聞など、コメントが載っているのを見ると、やはりドキッとすることが多いわけです。自分がしゃべったコンテキストというのが、まったく端折られて、逆に言えば、向こうが言いたいストーリーが最初にあって、そこに当てはまりそうなものだけをピックアップしてコメントにしまっているっていうのは結構あります。やはり、もうちょっと自分が伝えたかった微妙なニュアンスをきちっとそこに入れてほしいと思ったことは、もう何回もある。やはり怖いという経験が随分あるのです。朝日にしろ、他の何社かの取材を受けたことがあるのですけれども、電話で聞いていて、安直にこちらが聞かれていることに対して答えているのだけれども、やはりこちらが言いたい事っていうのは、きちんと理解しているって言うのは、必ずしも言えないですね。そういう意味では、他の人もこういう思いをたくさんしているのだろうと。

谷 町の反応などと言って、聞いていてもあれはおそらく最初からこういう反応を集めようというのがある、やっているのですよ。

倉田 だから、そういう意味でやはり、ジャーナリズムの学問としてはもちろん大事だと思うのだけれど、一方でもう少しジャーナリストになる人達の姿勢とか哲学的なものを、きちっと持った、そういう人材を育てないといけないのではないかと思いますね。特に、テレビなどのワイドショー的なものは、本当にそんなもののかけらもない訳ですからね。一方で、芸能的なニュースも、政治的なニュースも日常の我々の